

「川越まちづくり」の物語描写研究 —町並み保存に向けたまちづくり実践とその解釈—

澤崎 貴則¹・藤井 聡²・羽鳥 剛史³・長谷川 大貴⁴

¹正会員 独立行政法人都市再生機構 (〒231-8315 神奈川県横浜市中区本町6-50-1)
E-mail: t-sawasaki@ur-net.go.jp

²正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³正会員 愛媛大学大学院准教授 理工学研究科生産環境工学専攻 (〒790-8577 松山市文京町3番)
E-mail: hatori@cee.ehime-u.ac.jp

⁴正会員 株式会社リクルート (〒100-6690 東京都千代田区丸の内1-9-2)
E-mail: hasegawa_d@r.recruit.co.jp

近年、中心市街地の活力低下等が問題となっている中で、町の活気を取り戻すというような事例も見られる。こうした成功事例に着目し、如何にしてその成功が導かれたのかについての一般的知見を得ることは、今後のまちづくりにおいて有益であると考えられる。その知見を得る方法として、これまでは定量的な分析を行う自然科学的な手法が多く用いられてきたが、まちづくりに関わった人々の思いを理解するためには、“物語”を解釈するという解釈学的方法論を用いることが求められる。本研究では、まちづくりの成功事例として挙げられる埼玉県川越市を対象として、まちづくりの様々な関係者にインタビューを行う。そして、それらを通じて“物語”を構成し、その解釈によって「川越まちづくり」が成功に至った要因を論ずる。

Key Words : city planning, narrative, interview survey, hermeneutical study

1. 研究の背景と目的

近年、大都市への集中やモータリゼーションの進展等を背景として、多くの都市において中心市街地の活力低下が問題となっている。そうした中、住民自らが積極的に考え行政等に働きかけることで、活気を取り戻すというような、まちづくりの成功事例もいくつか報告されている。こうした成功事例において、如何にしてその成功が導かれたのかという一般的な知見を得ることは、様々な地域における今後のまちづくりの取り組みを成功へと導く上で、有益であると期待される。

さてここで、そうしたまちづくりの成功事例について一般的知見を得る典型的な方法として「自然科学的方法論」がある。この方法論では、1つや2つではなく、様々な成功事例をデータとして網羅的に収集し、それらを総合的に(場合によっては統計的に)分析することを通じて一般的な知見を抽出するという手続きが必要となる。そして、そこから得られる一般的了解とは、「まちづくりの成功を導くメカニズム」と、そのメカニズムより示

唆される「まちづくりの成功を“結果”として導く“原因”」である。しかしながら「自然科学」の対象は一般に、天体や物質等の“非精神的”なものである。それ故、そうした方法論が“精神的”なものに対して採用できるか否かについては、議論の分かれるところである¹⁾²⁾³⁾。

一方で、哲学の一領域である「解釈学」では、人間精神を理解する上で必要なのは“因果関係”ではなく“解釈”である、ということが主張されている。この解釈学ではまず、一切の人間精神の産物を「経験の表現」として捉える。そして、その経験の表現を通じてその背後にある「人間精神」について何かを了解するためには、その経験の表現に対する“解釈”が不可欠であるという立場に立つ。例えばデールタイは、経験とは、思考や行為とは異なり、環境、目的、手段、意図を包括的に含んでいる、と指摘している。そして、その経験について語られる言説、あるいは“物語(narrative)”を“解釈”することを通じて、その経験に含まれる環境や目的、手段、意図などが包括的に了解されるということが論ぜられている。さらに、そうした解釈において重要となるのは、

その言説や物語に対して“自己移入”を行い、「その物語の中を生きる」事なのだと言われている。そうすることではじめて、語り手の思考や感情のみならず、彼等が意識していない深い精神的な事柄までも取り出す事が可能となるのである⁴⁾。

また、価値観や信念を含む個々人のアイデンティティは、所属するコミュニティ内での「共有された物語」の影響を受ける事が指摘されている。そして、コミュニティ内における「共有された物語」もまた、個々人の語る“物語”に影響を受ける事が指摘されている⁵⁾⁶⁾。そのため、コミュニティにおける様々な活動に関する知見を得るためには、コミュニティ内で活動する人々の“物語”を集積・解釈し、地域の「共有された物語」について理解を深める事が必要不可欠であると考えられる。実際、地域の物語を集積し「共有された物語」を抽出し、地域の将来像を描く一助にしようと試みる研究もなされている⁷⁾。さらには、物語を聞くことによって、さもすれば伝承されず消えてしまうような過去の重要な出来事に関する知見を得る事が可能となるのである⁸⁾。

こうした「解釈学的方法論」は、異なる人物でも共有化しうる一つの一般的了解を抽出するにあたって、先述の「自然科学的方法論」とは異なり、必ずしも多様な事例を包括的に分析することを要請しない。むしろ、包括的分析を拒絶し、徹底的に特定の一つの経験、あるいはその表現の解釈を試みることを通じて、一般的了解を得ようとする。なぜなら、一人の人間が同時に複数の人生を生きることが不可能であり、いずれの時点においても一人の人生をしか生き得ないのと同様に、ディルタイが言うように自己移入を行い、その中を生きることが出来る物語は、それぞれの時点においては特定のものに限定しなければならないからである。それ故、まちづくりの成功事例について解釈学的方法論によって一般的了解を得るためには、特定のまちづくり事例、そして、それに関わった特定の人物を選定することが必然的に求められる。

以上の議論に基づいて、まちづくりの成功事例として、様々な文献で、あるいは専門家からも取り上げられることが多い埼玉県川越市を選定する⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾。そして、川越のまちづくりに関わった人物をさらに複数選定し、彼らに対するインタビューを通じて、まちづくりに関するそれぞれの人物の“物語”を収集する。そして、それぞれの人物のまちづくり物語を描写し、それらを横断的に解釈するという解釈学的方法論を採用することを通じて、まちづくりに関する一般的了解を得ることを研究目的とする。

このようにして描写した物語は、その読了を通じて、住民達はそのまちづくりに付与した思いや、問題に直面した際に感じた葛藤、そしてそれを乗り越えていく決然

たる意志など、住民達の間人精神を理解し疑似的に体験する事を支援する可能性が期待されることが、従来の物語に関する心理学研究において示唆されている¹⁾¹⁵⁾。そして民俗学では実際に、物語を通じて、住民が自らのまちの問題を他人事ではなく自身の問題であるという認識を醸成し、人々が自発的に地域に資する行動をとる傾向を促進する事が示唆されている¹⁶⁾。本研究は、こうした既往研究で理論的¹⁾、かつ、実践的¹⁶⁾に示されている物語描写とその解釈の有効性を、まちづくりの実践に活用することを企図したものである。

2. 川越のまちづくりの概要

川越市は現在、人口約 34 万人の中核都市であるとともに、「小江戸」と呼ばれる歴史的都市でもある。この町には昔から商業地として栄えた一番街通りがあり、その通りの両側に古くから残る蔵造りの町並みが広がり、国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも選定されている。この蔵造りの町並みを保全していく活動がこれまで盛んに行われてきた。

1970年代は、商店街の衰退やマンション建設がなされるという状況の中で、専門家による町並み保存の提言や、地元有志、青年会議所による保存運動が行われていた。そして、一番街商店街の活性化に向けて1983年に市民団体「川越蔵の会」が設立され、その蔵の会の提言を受けた地元一番街商業協同組合は、中小企業庁によるコミュニティ・マート構想による事業調査を行った。この調査に基づいて、1987年には「町並み委員会」が組織され、独自に「町づくり規範」という自主規制を作成し、個店改装の指導を行うなど、町並みの保全活動を進めてきた。その後、1992年に一番街通りの電線地中化が行われたほか、一番街周辺の街路整備（後述する歴まち事業）が行われるなど、まちの景観を良くしようと努力がなされてきた¹⁷⁾。そして、旧城下町の自治会から組織される「十カ町会」や商店街から町並み保存に対する要望書を受けて、1999年に「伝統的建造物群保存地区（伝建地区）」に指定されるに至る。

こうした活動が功を奏し、川越を訪れる観光客は年々増加傾向にあり、1989年は338万人であった観光客数が2009年には627万人にまで増加している¹⁸⁾。

3. 川越まちづくりの物語描写に向けて

(1) それぞれの視点からの物語描写とその横断的再解釈

こうした川越まちづくりの事実に経緯は、それを解

積するにあたって重要な情報を提供しうるものであるが、それをいくら積み重ねても、それだけでは必ずしもまちづくりの実態を表現することはできない¹⁹⁾。1.で述べた解釈学的論考のように、まちづくりというものを理解するためには、“物語”を構成し、整理することが必要である。

ただし、物語には幾重の“視点”が存在しうる²⁰⁾。そして“まちづくり”の物語には、様々な人々が関わるものであり、その物語の視点の多様性、重層性は、とりわけ大きなものとなる。については本研究では、川越のまちづくりに実際に関わった人々から直接、間接に伺ったお話を基に、著者らが、川越まちづくりの展開の中でとりわけ重要な、互いに異なる役割を担ってこられたと感じた人物を複数取り上げることとした。そして、彼らの視点からの、それぞれの「川越まちづくりの物語」についてお話を伺う。そうした個別の物語は、図-1に示したように、それぞれの人々にとっての「川越まちづくり」の体験に基づく個別解釈と云うるものであるが、その個別解釈を、著者らの立場から改めて解釈することを通じて、各人の物語について描写していくこととした。さらに本研究では、そうしたそれぞれの個別の物語を横断的に「再解釈」することを通じて、まちづくりの展開に資する、より一般的な了解を得ることとした。

なお、本稿で行った解釈については、お話を伺った本人に確認いただき、適宜追加インタビューや修正を行うとともに、その他の関係者からヒアリングを行った内容との乖離が生じていないかを照合した上で、再解釈した物語を完成させるという手続きを経ている。また、客観的な事実関係についても、文献資料を用いて内容に齟齬が無いかを確認している。こうした帰納的推論を重ね、社会的現実に向かうとする方法は、社会学におけるライフストーリー研究のアプローチ²¹⁾を踏襲するものと位置づけることができる。

(2) 川越まちづくりを支えた四つの役割

筆者らは、川越まちづくりの物語描写を行うにあつ

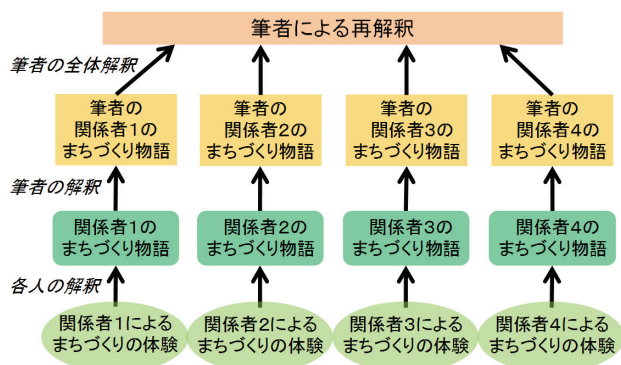


図-1 物語描写の構造

て、まずは川越市役所の方々に、川越まちづくりについて、どの方にお話をお伺いするとよろしいかという点を尋ねたところ、異口同音に二人の人物の名が挙げられた。一人が川越のまちの象徴的存在である「蔵」の保存とそれを活用したまちづくりに尽力してきた「町衆」の一人、可児一男氏(カニヤ本店社長)であった。そしてもう一名は、川越の“町衆”であると共に、市役所職員として、川越まちづくりに尽力してきた植松久生氏(川越市役所秘書広報監)であった。

この御両名は、川越のまちに住まう直接の“部内者”として、それぞれ“民”と“官”という役割を担いつつ川越まちづくりを進めた中心的な人物であったが、この御両名に加えて、川越まちづくりの展開の中で、重要な役割を担った、もう二名の名前が浮かび上がった。その二名の方々はいずれも、川越に住まう方々ではなく、川越外に住む“部外者”であるが、川越のまちづくりの展開にあたって、それぞれ異なった“専門”の立場から、非常に重要な役割を担った方々であった。

一人は、まちづくりの“専門家として、蔵の町並みの保存と整備のために様々な知的刺激を提供し続けた福川裕一氏(千葉大学大学院自然科学研究科教授)であった。そしてもう一名が、川越の町並みの中心軸をなしている道路と、その道路それを含めた都市計画の“専門家”である佐々木政雄氏(株式会社アトリエ 74 建築都市計画研究所代表取締役)であった。福川氏は、川越まちづくりを語る上で欠かせない「町づくり規範」の策定と運営にあたって極めて重要な役割を担った専門家である一方で、佐々木氏は、同じく川越まちづくりを語る上で欠かせない「伝統的建造物群保存地区(伝建地区)指定」において決定的に重要な役割を担った、都市計画や道路交通計画に関する専門家であった。

言うまでもなく、川越まちづくりには、以上に述べた四名以外にも実に様々な方々が関わりながら進展してきたものであるが、以上の四名は、川越まちづくりの展開にあたって欠くべからざる四つの役割を担った人々であった。その四つの役割とは、官(植松氏)と民(可児氏)の立場からまちづくりを支えた「川越の内部の二つの役割」と、その川越まちづくりをまちづくりの専門家(福川氏)として、そして都市計画・道路交通計画の専門家(佐々木氏)として支援した「川越の外部の二つの役割」である。

こうした背景から、上記の四名を対象にインタビューを実施した。インタビューは、対象者それぞれに対して2時間程度お話を伺いし、川越のまちづくりに関わってこられた経緯や、活動を進めてこられた中での苦難などを話していただいた。

それでは、川越まちづくりにおいてこの部内・部外の四つの役割をそれぞれの立場で担った四人の人物から伺

った話を基に、それぞれの立場からの「川越まちづくりの物語」を描写していくこととした。

4. 川越まちづくりの物語描写

(1) まちづくりを支えた町衆、可児一男氏

可児一男氏がまだ幼かった1940年代頃の一番街通りは、人通りが多く賑わっており、例えば路上には将棋をする大人達の姿などもよく見られたという。こうした情景を思い起こしつつ、可児氏は『子どもの頃は、のんびりしてましたから、良いまちでしたよ』と、当時の川越への郷愁を込めて語る。

しかしその光景は、戦後、一番街の南に位置する川越駅周辺へ賑わいの中心が徐々に移っていくことによって、一変する。1960年代半ばになると、一番街にあった大型商店が、売り場面積が広げられない等の理由により駅前へ移っていき、それにもなまってまちの賑わいが南の駅周辺へと移り、一番街周辺は徐々に衰退の方向に向かうこととなった。可児氏は、1965～75年頃の一番街通りの風景は、立ち並ぶ商店のシャッターは閉まり、車が通りすぎるだけで歩行者がいない様な、「閑散たる状況」であったと当時を振り返る。

そしてさらに1970年代には、蔵が姿を消していくこととなる。蔵が生活にとって不便であることや、当時は洋風建築を建てる風潮にあったこと等を背景に、蔵の持ち主が変わっていったり、代替わりする際に蔵の“取り壊し”が進んでいったのである。そして挙げ句には、以前に比べ半分程度にまで、蔵は減っていったという。可児氏はそうした蔵が姿を消していったのは、川越に住まう人々が、その蔵の重要性に気付いていなかったことが原因なのではないかと、当時を振り返る。川越に住む人々にとって、蔵があることが当たり前であると同時に、何か古くさいものであるとすら認識していたのではないかと。今でこそ蔵は川越のまちの財産だという認識が広まっているようにも思われるが、当時の人々にとっては、それほど特別なものでも何でもなかったのだ。

しかし、そうした中、一番街通りが衰退し、昔ながらの蔵が姿を消していく、そしてそれにもかかわらず、それを当たり前のことと住民は受け入れている、という状況に、可児氏は強い危機感を抱いていたという。

そうした危機感を抱いていた折、可児氏に、川越まちづくりに運命的に巻き込まれていく小さなきっかけが訪れる。それは、川越市が制作した、蔵造りの町並みを保存する取り組みを記録した番組が「地方の時代映像祭」にて受賞した折に支給された賞金の使い道の相談を、川越市の植松氏から受けたことであった（このあたりの経緯については、次節の植松氏から伺った話を描写する際

に、また改めて触れることとしたい）。この時、植松氏との相談の中で、これをきっかけに、数名の町衆と共に、蔵を保存することを目的とした「川越蔵の会」を設立しようじゃないかということになる。そして、その際、たまたま最年長者であった可児氏が、その初代会長を務めることとなったのである。

もちろん、この川越蔵の会を設立することにしても、その初代会長を引き受けたということも、可児氏が「たまたま」と言うように、偶然と言えれば偶然の出来事である。しかし、可児氏が言う「川越のまちを何とかしなければ」という危機感を、当時の可児氏が一切持っていなかったのだとすれば、蔵の会の設立に巻き込まれることなどあり得るべくもない。実際、可児氏は『自分たちでやろう、人に頼ってたんじゃダメなんじゃないか・・・』という思いを、その蔵の会の設立当初、強く持っていたのだと語る。

さて、そうした思いを旨に、可児氏は蔵の会の設立以後、蔵の町並みを守り、そして改善していく様々な活動に精力的に尽力していくこととなる。勉強会を開き、ブレイクストーミングを行い、素晴らしい町並みが余所にあると聞けば、現地にいったり視察を行う。そうするうちに、仲間も増えていった。そしてどうしたら町が活性化するかを皆で考えていった。当時は、皆が熱心に言いたいことを言って議論し合うような、活発な雰囲気、蔵の会にはあったのだという。可児氏曰く、『いい仲間が大勢いないとダメですよ』と、思いを共有した仲間と懸命に活動されてきたことが、まちづくりが進展していく大きな要因となっていたのである。

さて、そんな蔵の会の活動を進めるさなか、また次の大きな転機に向けてのきっかけが、可児氏に訪れる。ある時、可児氏は日経流通新聞の記事を見ていたとき、「コミュニティ・マート構想モデル事業」²⁾の存在を知ったのである。この事業は国の補助制度で、衰退しつつある旧来の商店街を暮らしの広場として整備・再生することを狙いとするものであった²⁾。可児氏はこの事業を川越でも実現したいという思いを抱く。そうしたことを思いついてからの可児氏の行動は早い。まさに機を見て敏、地元の代議士にすぐに相談したところ、その代議士は可児氏が、その事業の担当の通産省の大臣室に直接相談に行く機会を調整した。そして通産省の大臣室にまで足を運び、そこで川越の状況を話し、事業の採択を訴えた。その結果、通産省は川越の活動に関心を抱き、その事業採択を省内で決めることとなった。そしてその話が通産省中小企業庁からトップダウンで埼玉県庁を経て、川越市役所に伝わるということを通じて、各種の調整が図られ、最終的に事業決定に至ったのである。

さて、この商店街活性化を目的とするコミュニティ・マート構想では、現在も川越のまちづくりにおいて大き

な役割を担い続けている「町並み委員会」の設立や「町づくり規範」の作成へと繋がることとなる。また、川越の一番街通りの景観改善に大きく寄与した電線地中化についても言及されるものとなっていた。つまり、この事業は、まさに今日に至る川越の町並み保全活動の基礎を築く重要な役割を担うものとなったのであった。

この様に、可児氏が“偶然”にも、新聞でこの事業の存在を知ったということをきっかけに、住民と行政（川越市）との町並み保全活動を活発化させ、町の活性化へと繋がっていったのである。ただし、それは一面において“偶然”であったとしても、反面に於いてそれは“必然”であったと言うこともできるように思われる。川越蔵の会の設立とその会長就任の時と同じように、常に川越まちづくりにかける思いを常に携えていたからこそ、その偶然のチャンスを見逃さず、機を見て敏なる判断と行動に結びついたからに違いないからである。

さて、このコミュニティ・マート構想をきっかけに組織化されていった「町並み委員会」であるが、可児氏は現在でも、その委員長を務めている。この委員会では、同じく、コミュニティ・マート構想を契機に独自に作成された「町づくり規範」に則って、景観上の変更について助言、提案を行うものである。

著者らは、そんな委員会に参加させてもらったことがある。委員会には、商店街や自治会、学識者など、多様なメンバーが参加されていた。そして委員会では、多様な論点が議論され、そして場合によっては、対立するような意見や議論がなされることもあるようであった。しかしそんな対立があってもなお、一つ一つの意見に丁寧に耳を傾け、皆の意見を一つの方向性にまとめていこうとする可児氏の姿が印象的であった。おそらくは著者らが知らないような様々な問題や課題が、川越のまちづくりにおいてはまだまだあるのだろう。しかし、可児氏の姿には、そうした様々な矛盾や問題の一つ一つを、丁寧に解きほぐしていこうとする強い意志を感じた。こうした強い意志に基づく、ねばり強い調整を長年にわたって図られてきたことが、町並み景観の整備、ひいてはまちづくり全体を支えてきたのだと、感じずにはいられなかった。

そして言うまでもなく、そう感じているのは、たった一時、川越まちづくりの現場を垣間見た著者らだけではないようである。町並み委員会の終了後、そこに出席していたメンバーと雑談をしていたところ、『この会も、このまちづくりの取り組みも、みんな可児さんがねばり強くやってきた事を知っている。可児さんがいれば、まとまらない様な話も、徐々にまとまっていくんです』と語っていた。

町衆のリーダー的存在として、皆の納得を少しずつ少しずつ引き出し、まちづくりを一步一步前に進めてきた

可児氏——、この人物の周りの人々を引きつける真摯な真剣さ、そしてそれに裏打ちされた魅力とカリスマ性なくして、今の川越は今の川越たり得なかったに違いない。

(2) 町衆としての自治体行政官、植松久生氏

幼少の頃（1960年当時）に東京から川越に引っ越ししてきた植松久生氏は、当時の一番街商店街の寂れた風景を目にした時に最初に感じたのは、とりたてて面白みのない町だな、との感想だったらしい。そして、そんな感想を、植松氏は若い頃、ずっと持ち続けており、必然的に、川越のまちに対する関心もまた、薄いままであった。

しかし、それは何も、植松氏だけが特殊な市民であったというような事を意味してはいない。当時の川越市民の多くは、可児氏も指摘していたように、川越の町並みにとりたてて関心を持っていなかったのである。当時、“外部”の人々、とりわけ町並みに関する専門家達は、蔵を価値あるもの、保存すべきものと見なしていた一方で、蔵の町並みに実際に暮らす“内部”の人々にとっては、蔵の中は薄暗く、クーラーも簡単に設置するわけにはいかないの、何とも住みづらいものだ、という否定的に蔵を捉える向きも少なくはなかったとのことである。だから、保存を訴えていたのは主に蔵の周辺部あるいは外部の文化財保存派の人々であり、『（蔵に住む）地元商店主は保存運動に参加しなかった』という。

ところが、こうした状況は、外部の人々からの働きかけによって、少しずつ変わっていくこととなる。そのような外部の思いに、川越の地元の人々の中で反応する者が現れてきたのである。そして、徐々に、住民側も蔵の価値を見直していくようになり、蔵を保存しなければとの認識が住民の間でも、少しずつ共有されていったのだと言う。

同じ頃植松氏も、川越市に入所後広報の仕事に携わり、市民の方々に意見を聴くなど、市民と関わってきた。その中で、蔵を保存していこうとする市民の思いに直に触れることで、植松氏自身の中にも、まちを改善していこうという思いが醸成されていくこととなる。

そんな折、川越市は、1981年に川越の蔵造り商家を文化財に指定したことを受け、その取り組みを紹介する番組を作成した。植松氏もその作成に携わったこの番組は、全国から集められた各地域の取り組みの映像を集める「地方の時代映像祭」にて、賞を受賞するという幸運に恵まれることとなる。

この時、賞金が出されたのだが、その使い道が議論となった。市では賞金を雑収入に充てようという考えが一般的であったが、植松氏は、せっかく蔵造りの番組に対して賞金をもらったのだから、蔵の保存に取り組んできた地元の方々に還元すべきだと主張した。そして、賞金の受け皿となる組織を作るため、のちの「川越蔵の会」

設立を、可児氏をはじめとした地元の方々と検討することとなった。

植松氏がこの時、川越蔵の会を設立する方向へと調整を図った背景には、蔵の町並みが壊れていくことに対する危機感を持っていたことが大きかったという。当時、一番街周辺でマンション建設の話があった。蔵の保存を訴える周辺住民はそのマンション建設に反対したものの、結局建設されることとなってしまった。植松氏はこの時、マンション建設を阻止することが出来ずに挫折感を感じていた住民に、「もう一回やろうじゃないか」と声をかけようという思いがあったそうである。そして、その思いに、一人の町衆として川越の行く末を憂っていた可児氏が応えることとなる。

この川越蔵の会の設立が、その後の川越のまちづくりの展開を決定づけていった大きな転機であったことは、先の節に描写した通りである。つまり、「もらった賞金を何とかする」という小さなきっかけが、植松氏と可児氏の共同作業をもたらし、それが、今の川越のまちの有り様に重大な影響を与えることとなったのである。

この蔵の会において植松氏は、日中の市の業務を終えてから活動に携わっていくこととなる。つまり、植松氏にとって蔵の会の取り組みは、市の職員としての活動ではなく、あくまでも植松氏一個人、一人の「町衆」の活動であったのである。

一方で、植松氏は日中の市役所の職務の中では、あくまでも「一人の行政官」としての自らの責務を果たさんと努めておられたらしい。ただし、日中の職務の中で、植松氏は、まちづくりに対する「一人の町衆としての思い」を胸に秘めつつけておられた。そして、その「思い」に関わることが見いだされれば、その思いを実現するために求められる「一行政官」としての役割を全うせんと尽力されたい。こうした植松氏の活動姿勢は、川越まちづくりにおける重大な一つの展開となる「電線地中化」において大いに貢献することとなる。

川越蔵の会設立後に行われたコミュニティ・マート構想モデル事業では、一番街通りの電線地中化が検討された。これは、電線や電柱が、蔵造りの町並みにそぐわないことや、川越まつりの山車が電線に引っかかるなどして邪魔であったことが、その要因としてあった。しかし、莫大な費用がかかることや、一番街通りが県道であり、埼玉県と川越市の間で道路計画の意見が折り合わない等の背景があり、電線地中化が進まない状況がしばらく続いていた。

そんな折、一番街通りの下水道が老朽化しているという話を聞いた植松氏は、下水管を新しく入れ替えると同時に電線を地中に敷設することを考えた。そして、この電線地中化を行うには絶好の機会を逃すまいと、関係事業者とともに電線地中化を検討する。この時、植松氏が

市の道路管理課に配属されており、かつ、道路占用許可を取りに来る電力会社や通信会社、ガス会社等の方々と人間関係を築いていたことが、協議会の設立や議論の円滑化に大いに役立つこととなる。当時は、費用のかかる電線地中化に対し企業も積極的ではなかったものの、植松氏の働きかけによって関係事業者が電線地中化に乗り出すことになる。しかし、電線を地中化するにあたって、キュービクルの置き場を民地に提供してもらう必要があった。そのため、地元地権者との交渉が強いられることになったが、ここでも植松氏の住民との人脈が活かされることとなる。住民の協力を得ながら、およそ1年間の協議の末、必要な敷地の承諾を得て、整備工事を経て最終的に電線地中化事業が完成する。

このように、一番街通りの電線地中化が実現する背景には、関係者間の調整という植松氏の欠くべからざる重大な貢献があったのである。植松氏は『たまたまそういう時期にタイミング良く・・・あちこちをくっつけて合わせるようなポジションにいた』と語っておられたが、この事業は、様々な関係者との人脈を持っていた植松氏が、電線地中化を望む声が地元から上がっていた中で、より良いまちづくりを実現するために、“機を見て敏”に行動した結果、成しえたものだったと言えるだろう。

その後、川越市は蔵造りの町並みを守るために、伝建地区の指定を目指す（このあたりについては、佐々木氏の節にて詳しく述べることにしたい）、ここでも、植松氏が住民との協議において積極的な役割を担うこととなる。この頃、市の要請により、植松氏が伝建を所管する部署に“呼ばれる”という人事があった。伝建地区の指定を受けるためには各々の地権者の同意が必要であったが、植松氏は市の期待に応えるようにして、地権者の同意を得るために地域をまわったそうである。

このように、川越のまちづくりの進展に大きく貢献してきた植松氏だが、持続的な町並み保存運動を展開するには次の三点が重要となる、ということを一貫して認識し、主張し続けてこられたという。第一にまちづくりは住民主体でなければならない、第二に町並み景観の保存はただ単に保存だけを目的としてはならない、商業活性化を前提としてそれを通して結果として町並み景観が保存されるような展開を目指さなければならない、そして第三にそうしたまちづくりを展開するためのプラットフォームとして財団の設立が必要である、という三点である。

こうした認識は、「川越のまち」に対する真摯なる町衆としての「熱い」思いの下、その思いを実現するために必要な条件を行政官として「冷静に」分析する、という姿勢あつてのことだと言うこともできるだろう。いわば、植松氏はそうした姿勢で思い悩んだ末に、如何にそれが専門家にとって文化的な意義の高い蔵や町並みで

あったとしても、そこに住まう川越の住民が、その保全に主体的に関わらない限り、それが長きにわたって保存されていくことなどあり得ないであろうという重要な認識に辿り着いたのである。そして住民がそれに主体的に関わるためには、ただ単に「観光を重視する」という目的や「文化財は大切だ」という理念を掲げるだけでは、川越の人々の心が動かされることはない、という点にも、思いが至ることとなったのである。

こうした発想は、ただ単に、川越の街を残したいと考えるだけではなかなか生まれるものではなからう。ねばり強く、具体的にまちづくりを進めるという、自治体行政の職責においては常に求められる冷静な客観認識があってはじめて、こうした理念提唱に結びついたということが出来るだろう。そして、こうした植松氏の思いが実際のかたちへと結びつくようにして、「川越蔵の会」の設立を通じてはじめて、蔵の保存に向けた運動の先頭に、行政や部外の専門家ではなく、商店街の人々が立つこととなったのである。

この様に、“一人の町衆”として“行政官”の職責にあった植松氏は、蔵の会の設立、電線の地中化、そして、伝建地区指定といった、川越まちづくりにおける重要なそれぞれのターニングポイントにおいて、決定的に重要な役割を担ったのである。こうした植松氏の働きなくして、今の川越のまちは、今の川越たり得なかったことは間違いないのである。

(3) 川越の町並みを見守り続ける専門家、福川裕一氏

福川裕一氏が川越に関わるようになったのは、大学院の博士課程のときに、川越を対象に行われた日本建築学会のコンペに応募したことがきっかけであったという。その後初めて仕事として川越に関わったのは、博士課程を修了した後に、明治大学工学部建築学科の助手に勤務していた頃、1981年度に行われた「デザインコード調査」の時であった。この調査は、歴史的な町並みの周囲でマンション建設が進められつつあった1970年代後半に、町並み保存の重要性を認識しつつあった川越市が、マンション建設が進行する現状を打開するために、環境文化研究所に委託したものであった。その調査の委員会の委員長を務めたのが、福川氏の先生に当たる大谷幸夫氏（当時、東京大学工学部都市工学科教授）であり、福川氏もまた、この調査の委員会に委員として参画することとなったのである。

このデザインコード調査では、外観保存に限定されない環境維持のための仕組みの必要性や、町並みを単なる規制にとどめるべきではないこと、街区再編のあり方等が提言された²⁴⁾。しかし残念ながら、この調査を通じて作成された「川越の町並みとデザインコード」は、結果的には住民の目に触れる機会ほとんど無く、お蔵入り

となってしまったらしい。

福川氏は、この調査で、市全体として積極的に取り組む姿勢が見られず、少なからず不満を抱いていたようである。そんな中、この調査を通じて福川氏は、『町はもっと磨けばよくなるだろう』と感じていたそうである。

その後、「蔵の会」に福川氏も参加し、可児氏をはじめ、住民や市職員等との交流を深め、川越のまちづくりの取り組みに、専門家として深く関わっていくこととなる。

そんな福川氏が、本格的に川越まちづくりに関わるようになったのは「コミュニティ・マート構想事業」に参加した時であった。この事業の立ち上がりの経緯は、可児氏の物語描写の折りに述べているところであるが、この事業の中で、上記のデザインコード調査に専門家として参画していた福川氏が、重大な役割を果たすこととなる。

福川氏は、この事業に携わっていた当時には、週に何度も川越に足を運び、夜遅くまで話し合いを続けていたとのことである。話し合いは夜遅くまで及び、家に帰れなくなることもしばしばであったと言う。その中で、福川氏は、デザインコード調査の時から経験の踏まえ、一軒一軒の建築物のモデル的な設計を、それぞれの持ち主と話し合いながら手がけたという。

こうしたデザインコード調査、コミュニティ・マート事業へと繋がっていった流れは、さらに「町づくり規範」へと結実していくこととなる。

この「町づくり規範」は「町並み委員会」によって策定され、運営され続けているものであるが、技術的な部分は福川氏が中心となって作成したものであった。この規範は、人々の活動を強制的に“規制”しようとするものではなく、川越のまちにもともと備わる固有の価値を活かしつつ、人々のお互いの協力的な行動を促し、全体として価値の高いものが醸成されていくことを期するものであった（詳しくは、町並み委員会編「川越一番街町づくり規範」²⁵⁾を参照されたい）。

この町づくり規範は、強制力がとりたててあるわけではなかったものの、町並みの建築物に関わる一人一人の、町並みの保全と改善に向けた協力的な行動を促すことに、大いに貢献しているとのことである。そして、現在では市も、一番街周辺で建築行為を行う際には、町並み委員会に相談に行くよう促し、町づくり規範に基づいた設計が行われるよう指導をしているというようになったとのことである。

それだけ成功し、住民、商店からも大いに活用されている規範であるから、その策定にあたっては、さぞかし住民や商店の意見を十二分に反映したものであろうと思われたので、その旨を直接伺いしたところ、福川氏曰く、必ずしもそうではない、とのことであった。福川氏は、

よい町並みを形成したい、という強い思いの下、そのために必要な規範を、あくまでも専門家として取りまとめた、とのことであった。その規範作成の過程において、福川氏が採用したのは、建築家C.アレグザンダーの提唱する「パタン・ランゲージ」²⁰の考え方であった。この考え方は、町並み形成を考える上で採用される専門的概念の一つであるが、このコンセプトを採用することが川越の町並みを良質なものにすることに違いない、という揺るぎない専門家としての信念を、福川氏はお持ちであった。

ただし、福川氏は決して、川越とは無縁のところにある抽象概念を、ただただ川越に無作為に当てはめたわけでは決してなかった。上述のように、規範作成の時点においては、必ずしも住民の意見を直接採用した訳ではなかったとのことであるが、それはあくまでも、「直接的な意見」という次元においてのみである。既に上にも述べた様に、福川氏は川越の町並みを形成している一つの建築物のモデル的な設計を、それぞれの持ち主とじっくりと話し合いながら手がけたという経験が、そのパタン・ランゲージというコンセプトに基づいて町づくり規範を、専門家として作成していく上で、決定的に重大な意味を担っていたのであった。そうした経験を通して得た川越の町並みに対する深い理解があったからこそ、町づくり規範を専門家として自信をもって提案することができたのであり、そして、それが実際に住民、商店主にも受け入れられるという成功を収めるに至ったのである。

さて、こうした経緯を経てつくられた町づくり規範であるが、その運用においてもまた、様々な悩みを福川氏はお持ちであった。古い建物は、残していくということが基本であるため、相対的には難しさはそれほど大きなものではないとのことである一方で、「新しく建てる」場合のデザインについてはなかなか難しさがあるとのことであった。実際に、『安易なものをつくらなくともならない』と語る福川氏は、周囲の蔵のようにただ黒く塗ればよいなどという表層的な発想で“似非蔵造り”の建築物が建てられている現状を問題視されていた。モダンな建築であっても、川越のまちに似つかわしいものはあり得るはずなのであり、かつ、そういうものがあるのははじめて、川越のまちは、よりよいものへと展開・進化していくに違いない。

しかし、そんな展開や進化は必ずしも容易なものではない。福川氏は言う、『意見も分かれるし、何が良いかこっちはわかんないこといっぱいだし…試行錯誤ですね』。福川氏の言うこの「試行錯誤」は、デザインコード調査においても、コミュニティ・マート事業においても、そして、町づくり規範の作成においても常に繰り返されたのであろうと思わずにおれない。そうした試行錯誤が存在していたからこそ、週に何度も川越に足を向け、

夜遅くまで話あわねばならなかったのであろうし、その果てに得たものだからこそ、町づくり規範の一つ一つのルールを、自信を持って提供しえたに違いないだろう。もし一遍の悩みも試行錯誤もなく、特定の専門知に対する信仰のみで何もかもを決めてしまうような専門家であったのなら、川越の町のかたちを決定づけるような「町づくり規範」を、提示しうるなど不可能であったに違いない。

繰り返しとなるが、福川氏はその策定にあたって中心的な役割を担った「町づくり規範」は、現在の川越の町並みに決定的な影響を与え続けているし、その影響は、川越まちづくりが続けられていく以上、継続していくであろうものである。そんな実行力ある町づくり規範がつくられた背景には、川越の町衆と行政の、可児氏や植松氏をはじめとする様々な方々の思い、そして、それに基づく蔵の会の設立やコミュニティ・マート事業等の展開があったことは間違いない。しかし、それが、良質な町並みを保全し発展させていくものたり得るためには、町並み保全についての「プロフェッショナル」の存在が不可欠であったに違いないのである。福川氏は、「蔵の会」に属し「町並み委員会」に属し、川越に足繁く通い、川越の様々な人々とじっくりと話し合い、一軒一軒の建築物に向き合い、川越のまちについて深く理解を少しずつ醸成させていきながらも、あくまでも、川越の町衆から一線を画す一人の「プロフェッショナル」として、川越のまちに對峙し続けた。こうした川越のまちに対する絶妙な立場の取り方なくして、町づくり規範も、その実質的な効果の発揮もあり得なかったに違いないだろう。先述の可児氏も、町づくり規範策定をはじめ、今なお川越を見守り続けている福川氏の功績をたたえている。

川越のまちは、福川氏という、「まち」に対する絶妙のバランス感覚と共に、「まちづくり」に対する卓越した専門知を携えた一人のプロフェッショナルなくして、今の発展はあり得なかったに違いないのである。

(4) 伝建地区指定を陰で支えた都市計画・道路交通計画の専門家、佐々木政雄氏

都市計画コンサルタントを主宰している佐々木政雄氏は、単なる効率性や合理性を高めるような都市計画ではなく、歴史・伝統を重んじる都市計画とこれを基にした道路交通計画、本来の都市や地域に求められているに違いないという強い思いを、長らく持っておられた。そんな思いから、伝建地区の保全整備を支援するために建設省が創設した「歴みち事業（歴史的地区環境整備街路事業）」¹⁰に様々な現場でコンサルタントとして関わり、萩市や金沢市などの様々な都市にて歴史的地区の整備計画に携わってこられていた。

そんな中、川越市の担当者が一番街の都市計画道路変

更について佐々木氏のもとに相談に来られたのが、川越に関わるきっかけであった。

市の担当者らが佐々木氏に相談に訪れたのは、当時の川越において、蔵の町並みの保全と都市計画決定とが互いに整合しておらず、いかに対処すべきか苦慮していたためであった。その不整合とは、次の様なものであった。

まず、前述したコミュニティ・マート構想事業では、その補助金を一番街通りの蔵の保存に充てる予定であった。それに加えて、当時、一番街の周辺でマンション建設計画がもちあがり、数棟が建設されてしまったことから、現状のままではマンション建設等によって歴史的な景観が損なわれるという危機感が、関係者の間で共有されていた。そして、そうした問題に対処すべく、蔵造りの町並みを「伝建地区」に指定すべきだという声が出てきていた。伝建地区とは周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いものを保存するための地区を行政として指定する、という制度に裏付けられたものであるが、この地区の指定にあたっては、都市計画区域では都市計画法による地域地区の一つとして都市計画決定を行う必要があった²⁷⁾。

ところが、もともと一番街通りは道路幅が都市計画決定されており、その計画が実行されれば蔵は取り壊されることになっていた。そのため、将来壊されることが法的に定められているような蔵に、コミュニティ・マート構想で盛り込まれた公的な補助金の拠出にせよ、伝建地区指定についても、法的に問題ありとされていた、とのことであった。こうした不整合があったが故に、蔵の保存のための公共支援も伝建地区指定の調整も頓挫してしまっていたのであった。

こうした背景から、蔵の町並みを保存していくための公的支援を展開するには、この不整合を何とか解消することがどうしても求められていたのであった。そしてその不整合の解消に向けた現実的な方策の一つが、「都市計画道路の変更」であった。

しかし、この都市計画の変更も容易なものではなかった。なぜなら、蔵を保存するために必要となる都市計画変更は、一旦決定した都市計画道路の道路幅員を「縮小」という種類のものだったからである。当時、主要幹線道路として位置付けされている都市計画道路（幅員 20m）の幅員を縮小するような都市計画変更は日本国内でも前例がほとんどなく、前例踏襲主義が色濃い日本の都市計画行政においては、その都市計画変更は、極めて困難と思われていたのである。

以上のように、不整合を乗り越えて町並み保存をしていくためにどうすればいいのか、なかなか妙案が見つからなかったのである。いわば、「川越のまちづくり」という地域的活動が、「都市計画法」という日本国の行政的制度の存在と、直接対峙せざるを得なくなったのであ

る。

については、川越市の職員は、まずは政府の文化庁の伝建地区の担当者である益田兼房文化財調査官（当時、現立命館大学教授）に、この問題についてどのように調整を進めれば良いのかの相談に伺ったそうである。その時に、益田氏は、この問題は「文化行政」のみに関わるものではなく、「都市計画行政」に直接関わるものであるから、その筋のプロフェッショナルに相談することが必要であろう、と助言されたそうである。そして、その時に、益田氏が紹介したのが、当時氏が萩市の歴史的地区における都市計画道路整備とともに仕事をしていて、佐々木氏だったのである。

川越市は、この助言を受けて、早速佐々木氏のところに相談に伺った。この時に、佐々木氏の所に相談に来られたのが、川越市の職員と、本稿で紹介した福川氏の薫陶を受けたコンサルタントの方々であった。

こうした経緯をふまえると、歴史と伝統を重んじる都市交通計画が必要であると考え、そうした仕事を手がけていた佐々木氏と、同じく歴史と伝統を重んじる都市交通計画を進めようとしていた川越市が関わることとなったのは、半ば必然的であったとも言えるであろう。

さて、この打ち合わせの席で、川越市の担当者は、これまでの経緯を説明し、都市計画道路の縮小変更がどうしても必要であり、そのためには、どうすれば良いのかの助言を請うた。それを受けて、佐々木氏はまず、都市計画道路の変更には、当時の制度では建設大臣の許可が不可欠であること、したがって、そのためには、建設省担当課である都市計画課の同意を取り付けることが必要であること、さらには、そのためには、縮小変更が必要である論理を組み立てることが不可欠であることを助言されたとのことである。そしてさらに、そのための具体的な次の一手として、佐々木氏がこれまで関わってきた、文化庁と建設省が協働で事業を進める「歴みち調査」を、国の補助をもらいながら実施すること、そのためには関係者による検討委員会の設置が必要であり、その委員長は新谷洋二先生（当時東京大学教授）が必須であること等を提案されたそうである。

川越市は早速このアドヴァイスを受けて、1985年度に「歴みち調査」を、佐々木氏にコンサルタントとして関わるかたちで実施することとなった。この調査では、一番街通りの計画変更をして、拡幅を伴わない道路整備の必要性が提起されるとともに、歩行者ネットワークの整備と、景観整備を進めるための景観条例の整備などが提案された。それと共に、一番街の交通量を削減するためにも、4車線バイパス道路の整備が不可欠であることが主張された²⁸⁾。

ところでこのバイパス道路整備という提案は、一番街の交通量の削減のために、川越のまちづくりにとって必

要不可欠な要素なのであるが、こうした提案は、「文化行政」の議論だけからは、演繹されるものではないだろう。つまり、やはり、川越のまちづくりには、あるいはより具体的に言うなら、伝建地区指定のためには、「文化行政」と「都市計画行政」の融合がどうしても求められていたのである。この歴みち調査は、その両行政の「縦割り」をどう乗り越えるのかの第一歩となった取り組みであったと位置づけることができるであろう。

さて、この歴みち調査の結果を受けて、さらに、本格的に都市計画道路変更へと舵を切るために、川越市は、「川越市歴史的地区整備に関する調査」(1989年度)の調査委員会を立ち上げることとなる。この調査は、歴史的景観地区の整備計画と、一番街通りおよびその周辺の街路修景計画を行うことを目的として行われたものであった²⁹⁾。言うまでもなくこの調査も最終的に都市計画道路の縮小変更を見据えたものであるから、建設省の担当者の参画は是が非でも必要であった。そして、この委員会の立ち上げやそのための調整等において、佐々木氏がこれまでの歴みち事業等を通じて直接、仕事を共に行った学会や行政・建設省の様々な方々との人脈が貢献することとなる。

とりわけ、この調査の委員会において重要な役割を担われたのが、新谷洋二東京大学教授(当時)であった。新谷氏と佐々木氏とは、川越のこの調査の前にも既に、萩市での歴みち事業の委員会で、委員長とコンサルタントというかたちで共に仕事をされていたそうである。今でこそ、公共政策の中で景観や風土を重視すべしとの考え方はそれなりに公共事業関係者の中でも知られつつある状況にあるが、当時は公共事業の中で、それもとりわけ道路事業の中で歴史を重視するという考え方はほとんど世間的には浸透していないのが実情であった。そんな時代において、道路計画、都市計画の専門的な知識と見識を十分に持ち、しかも、歴史性を重視しながら道路の計画を変更することが必要であるということを手伝うことができるような学識経験者は、極めて貴重な存在であったのである。しかも、佐々木氏曰く、全国の様々な都市計画を支援していた新谷氏は、建設省からの絶大な信頼を得ていた。その一方で、歴みち事業等の実績を通して、文化庁側からの信頼も厚かったとのことである(新谷氏はその後、文化庁文化財審議委員に就任している)。こうした新谷氏の委員長就任によって、川越の都市計画決定の縮小変更がさらに前に一步進むこととなったのである。

さらに、この委員会において重要な役割を担ったのが、建設省(当時)の松谷春敏氏であった。松谷氏は、当時、都市計画変更に関わる諸行政を所管する担当部局である都市計画課の課長補佐をされていた。そして松谷氏は、この委員会の「幹事長」を担当することとなった。こうした委員会の布陣をひくことで、「国レベルの都市計画

行政側」としては、都市計画道路の縮小変更を検討する環境が実質的に整えられたのである。

ただし、この調査から簡単に伝建指定へと進められた訳ではなかった。この調査で提案された都市計画案(俗称「へび玉道路」と呼ばれる、歴史遺産である蔵の部分を残し、それ以外は幅員を広くする、という都市計画変更案。ファサード修景により実際の町並みは連続性が保たれる計画であった)が、凸凹の町並みになるのではという誤解を与え、住民から大いに反発を受けてしまったらしい。つまり、「国レベルの都市計画行政側」の考え方と、住民との考え方の間に、一定の乖離が存在していたのであった。

しかしこの件をきっかけにして、この道路をどうすべきなのかという議論が、川越市の住民の間でも頻繁にされるようになる、という意図せざる効果があったらしい。そしてその結果、住民の間でも、都市計画道路の縮小変更、そして、伝建指定に向けた機運が高まっていったらしい。そして、住民、川越市、埼玉県、建設省、文化庁というそれぞれの主体の間で様々な議論がなされ、調整が図られ、1999年、ようやく、「都市計画行政」における都市計画の縮小変更(1999年4月9日)と、「文化行政」における伝建指定(1999年12月1日)が決定されたのである(なお、このあたりの詳細は、新谷洋二編著「歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり」¹⁰⁾を参照されたい)。そしてこの伝建地区指定は、国の文化財として特に高い価値を有しているものとして認定され、文化庁によって「重要伝統的建造物群保存地区」²⁰⁾として選定されるに至っている。また、懸案の4車線バイパス道路もほぼ同時期に都市計画決定され、さらにその後事業化され、数年後には全線開通予定となっている。

この様に、伝建地区指定、そしてそのための都市計画道路の縮小変更、4車線バイパス道路整備は、様々な人々、様々な主体がそれぞれ重要な役割を担うことではじめて実現されたものである。ただし、その中でも「国レベルの、都市計画行政と文化行政の間にある縦割りの壁」と「前例の無かった、都市計画道路の縮小変更を行うという障壁」は、とりわけ乗り越えることが困難な障害であったものと言えるだろう。そんな壁は、住民や川越市の職員や文化行政に携わる専門家といった、川越まちづくりを支えてきた人々の力だけでは、乗り越えることは難しかったに違いない。そんな中で、佐々木氏は、川越のまちづくりの展開にあたって、「都市計画行政」についての豊富な知識、そして、歴みち事業を通じた文化行政の方々を含めた様々な人脈を持つ、外部のプロフェッショナルとして欠くべからざる重要な役割を担ったのだと言うことができるだろう。

こうした佐々木氏の川越での仕事は、まちづくりの表

舞台というよりはむしろ、まちづくりを陰で支えた一専門家のそれと呼ぶに相応しいであろう。まちづくりが実質的に展開していくにあたっては、柔軟で、時に新しい発想と仕事を手がけつつも、豊富な知識と見識を備えたこうした専門家の存在が極めて重大な意味を持つのである。

5. 川越まちづくりの解釈学的考察

以上、本稿では、川越における、伝建地区指定に至るまでのまちづくりに関わった四名の方々の実践を物語的に描写してきた。本章では、まちづくりの展開に資するより一般的な理解を深めるべく、以上の物語描写を横断的に解釈する。

(1) まちづくりにおける町衆・自治体行政・専門家の三者の存在の不可欠性

「町衆」としての可児氏、町衆としての「川越市行政官」植松氏、川越市を見守り続けている「町並みの専門家」福川氏、そして、伝建地区指定を陰で支えた「都市計画・道路交通計画の専門家」佐々木氏についての物語描写は、それぞれの実践が不在であれば、川越まちづくりは今日の様に進展しなかったであろう程の、川越まちづくりの展開にとって不可欠の要素であったことをそれぞれ示唆している。

第一に、まちづくりはあくまでもそのまちの人々、自律的な改善に向けた持続的実践過程を言うものである以上³⁰⁾、まちづくりに向けた情熱と強い意志を兼ね備えた「町衆」の存在が、何にもまして不可欠であることは論を俟たない。実際、川越まちづくりの展開において重要な契機は、町衆の主体的な活動が活性化した「蔵の会」の設立にあった。そして、こうした町衆の活動を牽引してきたのが可児氏だったのである。もし仮に、川越市や、町並みや都市交通の専門家がどれだけ川越のまちづくりを進めようと躍起になったとしても、自律的なまちづくりの展開を志したこうした可児氏の果たした役割なくして、川越まちづくりの自律的な展開は期待し得ぬものであったことは間違いないだろう。

また、その町衆のまちづくり活動を直接的に支え続けたのが、川越市役所であった。川越市の働きなくして、あのタイミングで「蔵の会」が設立されることはなかったであろうし、電線が地中化されることも、伝建地区指定がなされることもあり得なかったであろう。そもそも行政の支えが無い限り、まちづくり活動は、それ自身では公的な権限を持ち得ない一住民活動の域を出ず、その町が抱える様々な問題を扱う上では限定的なものに留まる危険がどうしても高くなる。そして、そんな行政がま

ちづくりに関わるにあたって何よりも重要であったのが“町衆としての行政官”という、そのまちの自治体行政府においてはじめて存在しうるであろうかたちの行政官である。本稿で紹介した植松氏はまさにそうした“町衆としての行政官”であった。ただし、そもそも植松氏のまちづくり活動は、役所の仕事以外の部分が大半を占めるものであったのであり、植松氏の自治体での仕事に占めるまちづくり活動関連の仕事の割合も、植松氏のまちづくり活動に占める自治体職員としての活動の役割も限定的なものであった。しかしそれでもなお、川越のまちづくりの展開において、まちづくりに励む「町衆」である植松氏が自治体の職責にあったという事実は、極めて重大な意味を持っていたのである。本稿で描写したように、いわば、植松氏という一人の町衆が「たまたま」自治体に勤めていなければ、川越があのタイミングで蔵の会設立や電線地中化の好機を得なかったであろうし、地元的地権者との膨大な調整が必要となる伝建地区指定の実現もより困難なものとなっていたに違いないと考えられるのである。

この様に、川越のまちづくりは可児氏や植松氏に代表されるような「町衆」の取り組み無くして進展することはあり得なかったと言えるのである。しかし、そうしたまちづくりを進めていく上での様々な課題をその町に住まう人々だけの力によって克服していくことの限界は、好むと好まざるとにかかわらず生じてしまうこととなる。そんな時、適切な見識と豊富な人脈を持つ、そのまちの「外部のプロフェッショナル/専門家」が必然的に求められることとなる。川越まちづくりにおいても、町並み保全の専門家である福川氏、そして、都市計画・道路交通計画の専門家である佐々木氏の貢献なくしては、川越まちづくりにおいて重大な役割を担う「町づくり規範」の制定や「伝建地区指定」も実現し得たとは考え難いであろう。

この様に、川越まちづくりの展開において、少なくとも本稿で登場した町衆、自治体行政、専門家がそれぞれ担ってきた役割はどれも不可欠なものであったのである。そして、上に述べた議論はいずれも、こうした「町衆」「自治体行政」「外部の専門家」は、どのようなまちづくりにおいても、多かれ少なかれ求められる不可欠な要素であるであろうことを暗示している。まちづくりが「まちづくり」と呼ばれる主体的実践活動である以上、町衆の存在は不可欠である。まちづくりが様々な法令に関わり、面的に広がりを見せるものである以上、どうしても公的な権限の行使が不可欠であり、したがって、自治体行政の力なくしてまちづくりが進展するともまた、考えられない。さらに、どのようなまちであろうとも、まちづくりに必要な知識や人脈をそのまちの内部に求めることができなくなる局面が遅かれ早かれ訪れることと

なるのである。

(2) 専門家の「部外者としての真剣さ」と、地域の「熱意」の“化学反応”としてのまちづくり

以上で述べた通り、川越のまちづくりは、川越に住まう人々と、彼らのまちづくり活動を支援する外部の専門家とが、連携、協力し合いながら、まちづくりを進められたものである。言わば、部外者の専門家と、情念に裏打ちされた意志としての熱意を持つ地元の人々の実践が、ただ単に混ぜ合わされたのではなく、(風土論において比喩的に言われるような、いわば³¹⁾) “化学反応”とも言う総合的な融合過程の帰結として、まちづくりが進展したのである。

ここで、専門家は、あくまでもその地域の“部外者”として自身の持つ専門的な見識を地域に提供する、という立場に立たざるを得ない。ただし、このことは、“部外者”たる専門家が地域の実情を無視して、その専門性を地域に唯唯“適用”すれば良いというものでは決してない。福川氏、佐々木氏においてそうであったように、専門家は地域の実情に真摯に向き合い、そこで適切な判断を為すべく試行錯誤することが求められる。しかし、それでもなお、自分は“部外者”であるとの自認に基づき、客観的な立場から、その地域のために適切な判断とは何かを問い続けることが求められる。このように、地域に身を置きながらも、あくまでも専門家という“他者”“第三者”として、その地域に対峙するという微妙な立場を貫き通そうとする姿勢が、まちづくりに関わる専門家には常に求められることとなるのではないかと思われる。

しかし、専門性と地域性の双方に真面目に向き合おうとするそうした姿勢の内にこそ、専門家としての「真剣さ」が宿るものとも言えるであろう。そしてこうした専門家としての「真剣さ」があってはじめて、地域にとって第三者にしか過ぎない専門家は、地域に受容されうる判断を紡ぎ出すことが可能となるのであり、それを通じて、まちづくりの展開に貢献を果たすという実践に参画する幸運を手にすることが可能となるのではなかろうか。一方言うまでもなく、仮に専門家にこうした「真剣さ」があったとしても、まちづくりにかける「熱意」が地元で不在であれば、まちづくりが進展することなどあり得ない。繰り返すまでもなく、まちづくりは、そのまちの町衆の主體的な実践過程そのものを言うからである。しかも、専門家の「真剣さ」を、地域の「熱意」が引き出したという側面すらあったことは間違いないだろう。なぜなら、地元で熱意があるからこそ、例えば福川氏が週に何度も川越に足を運んだように専門家もそれに応えようとするようになるという側面があるに違いないと考えられるからである。つまり、地元が熱心であればある

ほど、専門家も真剣にならざるを得なくなるのである。

しかし、まちづくりの全ての源泉だとすら言う地元の「熱意」の活性化という点に於いて、外部の専門家が重大な役割を担っているという側面も、川越のまちづくりの実践描写からうかがい知ることができる。

例えば、可児氏や植松氏が異口同音に指摘しているように、川越の蔵はかつて、地元の人々にとって文化的に価値あるものというよりはむしろ、何だか古くさい存在として捉えられていた一方で、部外者の専門家が、その価値を認め、その保存を訴え続けていたという事実がある。もしその時、部外者の専門家の内に「この町並みを残さねば」という専門家としての思いがなければ、川越の地域内においてもそうした思いが消滅していき、それに伴って現在の川越の蔵の町並みもまた跡形もなく消え失せていたことも十二分に想像し得る。あるいはこの事の他にも、専門家の真剣さが、他ならぬ“我がまち”に向けられているという事態を目にすることで、その真剣さに「報いなければ」と感ずる、すなわち、「意気感ずる」ということは決して皆無では無かったのではないかと想像され得る。

この様に考えれば、「地元の熱意ある人々が、外部の専門家が提供する知識を活用する」という一方向的な関係性よりもさらに複雑で、相互連関的な関係性が、外部の専門家と地元の人々との間に、さらに言うなら、部外者としての専門家の「真剣さ」と、地域の「熱意」との間にあったのだという様子をうかがい知ることができる。つまり、まちづくりというものは、そうした異質なるものの間の化学反応の帰結として進展し得るものであると解釈できるのである。

(3) “機を見て敏”なる自発的行動

以上、それぞれの立場の人々との関係性や役割について述べたが、それぞれの立場の実践において共通する重大な要素として次の様な側面を指摘することができる。それはすなわち、本稿で紹介したいいずれの人物も、まちづくりを進めるための重要な好機が訪れた折りに、すぐさま“機を見て敏”に行動した、という点である。

例えば、可児氏はコミュニティ・マート構想の存在を知るや否や、事業の実現に向けて積極的に働きかけていったし、植松氏は一番街通りの下水管工事の機会を逃さず、それに併せて電線地中化を推し進めた。福川氏は、町づくり規範の作成に携わる機会を得るやすぐさま、専門家としてその有効性を信ずるパタン・ランゲージの考え方を参照しつつ、川越の町並みに相応しい町づくり規範を短期で集中的に作り上げた。そして佐々木氏は、川越市の相談を受けるや、それまで培った人脈や知識を最大限に動員しつつ、伝建地区指定への体制づくりに向けて重大な役割を果たした。これらの行動はいずれも、川

越まちづくりの前進に極めて甚大なる貢献を果たしたもののばかりである。逆に言うなら、もし各人がそうした好機に、それぞれの行動を起こしていなければ、川越のまちづくりが今日のような進展を果たしていたとはとても期待できなかったに違いないと考えられるのである。

ここで強調すべき点は、そうした好機にたとえ行動しなかったとしても、各人は何らペナルティを科されることはなかったであろうということである。つまり、この四名は皆、強請されるまでもなく、自発的に、言わば独立自尊の意志を持ってそうした仕事に赴いたのである。

もちろん、そうした機会は日常的に訪れるというものではない。それにもかかわらず機を見て敏に対応することができたのは、おそらくはより良いまちを実現せんとする意志に基づく緊張感を、どこかで常に保ち続けておられたからなのだと考えざるを得ないだろう。そして地域の置かれた状況全体を見通すある種の大局観が不在であれば、それが動くべき好機なのだと判断することもできなかったであろう。こうした意味において、ここで紹介した各人はいずれも日常において機を見て敏に動きうる精神の構えを保ち続けていたと解釈し得るだろう。

この点についてさらに踏み込んで考えるなら、まちづくりが進展していないまちにおいて、その状態の原因を「そのまちに好機が訪れていないからなのだ」という点に求める態度は、必ずしも正当なものとは言い難い、という点も以上の考察から演繹することができるであろう。なぜなら、好機が訪れていないように見えるのは、機を見て敏に振る舞いうるだけの精神の構えが不在であったからだけかも知れないからである。そうであるとするなら、機を見て敏に振る舞えるだけの緊張感を、それぞれのまちにおいて日常的に保ち続けることができるか否かということが、まちづくりの成否を分ける重要な要素となっているに違いないと考えることができるであろう。

(4) まちづくりを成功に導く謙虚かつ毅然とした態度

以上に述べたように、地元の人々が地元でこだわり続ける姿勢や、機を見て敏なる態度を携えておくことは、町づくりの進展において欠くべからざる重要な要素であると考えられるが、こうした態度や行動を導く根幹にあるのは、恐らくは、「謙虚さ」なのではないかと思われる。

まちづくりのリーダー的存在の可児氏が、もしも誰の意見も聞かない様な傲慢な人物であったなら、町並み委員会の運営において一人一人の意見を尊重するような態度を保たなかったであろうし、もしそうであれば、町並み委員会が設立以降、長らく様々な参加者を集めつつ持続し続けているということも無かったに違いないであろう。植松氏がもし仮に傲慢であったなら、町並み保存に行き詰まった時に文化庁の担当官や専門家の佐々木氏に

尋ねに行き、そのアドバイスに耳を傾けることがあったとは考えがたいであろう。もし仮に福川氏が傲慢であったなら、デザインコードをつくる際に、さして川越に通うこともなく、自らが信ずる理論だけに基づいて作ったかもしれないし、佐々木氏が傲慢であったなら文化庁と建設省をまたぐ様々な調整事項を、様々な人々の意見に耳を傾けながら一つ一つ解きほぐしていく陰の調整役を黙々と続けることはできなかったに違いないだろう。

しかしその一方で、彼らの姿は「謙虚」ではあるものの、ただただ、他者におもねるような「卑屈」な姿からはほど遠いものであったということも言えるように思える。そんな卑屈な態度というよりはむしろ、「毅然」とした態度を見いだすことができるのであり、かつ、それがあつたが故に、それぞれが川越のまちづくりに欠くべからざる重大な貢献をなし得たのだと言いうるように思える。

例えばもしも可児氏が卑屈であれば、まちづくりの信念を持つリーダーたり得ることなど、そもそも有り得なかっただろうし、植松氏が、自分には何もできないと感ずる卑屈な行政官であったのなら、蔵の会の設立を提案したり、電線の地中化に向けた各種調整を図ろうとすらしなかったに違いない。そして福川氏にしても佐々木氏にしても、専門家としての毅然とした態度がなければ、意見を求められたときに人様にアドバイスをを行うようなこともできなかったに違いない。

すなわち、ここに登場した人物は皆、謙虚さを保ちながら、毅然とした態度を携えていたのだと解釈せざるを得ないのである。そうした卑屈ならざる謙虚さと、傲慢ならざる毅然さを兼ね備えた人物こそが、川越まちづくりの展開という大きな「共有された物語」に大いに貢献しうる機会に預かることができたのである⁵⁾⁶⁾。

この事はさらに、次のような解釈をさらに示唆するものである。

すなわち、川越まちづくりに実質的に大いなる貢献を果たした人々はいずれも、川越まちづくりという「大きな物語」(そこに関与する人々の共同作業として紡がれる物語³²⁾)の中で、自分自身ができることできないことを謙虚かつ毅然と理解し、自らの役割を遂行せんとしたのである。その時に傲慢であれば、川越まちづくりという大きな物語が目映ることもなく、卑屈であれば自らの役割を見出す事などできなかったに違いない。謙虚であるからこそ川越まちづくりという大きな物語と自らの役割を見いだすことができたのであり、毅然とした態度を携えていたからこそ、そうした役割を、機を見て敏に、自ら進んで、買って出たことができたのである。そうして彼らは皆、川越の物語という大きな物語に身を委ねつつも、彼ら一人一人の自分個人の物語を紡ぎ出し得たのである⁵⁾⁶⁾。筆者らが直接伺ったそれぞれの川越

まちづくりの物語は、こうして紡がれた一人一人のまちづくり物語だったのである。

こうみると、行政や非行政、川越内部や外部といった違いはあれども、皆、真剣に自らが為すべき役割を、あるいはさらに言うなら、自らしか為し得ぬ役割を、進んで引き受けた人々なのだと言うことができるだろう。そう考えるなら、まちづくりを成功させるには、オルテガの言うような、大きな物語に身を委ねることなどできぬ自閉的な世界に住みながらも傲慢にも自らには何もかもなし得るのだと無根拠に信ずる「大衆人」(the mass man)からはかけ離れた、自ら責務の中に打って出る「精神の貴族」³³⁾が不可欠なのだと言うことができるだろう。

その一点を踏まえるなら、川越まちづくりの成功は、蔵があったからではない、とすら言えるのではなかろうか。蔵を残そうと考えた「精神の貴族」がいてはじめて、そのまちづくりが展開したと言わざるを得ないのではなかろうか。

もちろん、筆者らは、川越のまちづくりの展開において「蔵」が果たした決定的役割を否定するものでは決してない。言うまでもなく現在の川越のまちづくりの物語において、蔵は欠くべからざる、おそらくは最も重大な意味を帯びたものであることは間違いない。しかしそれでもなお、まちづくりは、そんな歴史的遺産があるがなかろうか、そこに「人間」がいるかぎり、どんな土地でも展開できて然るべきなのである。なぜなら、どんな状況にあろうとも、人間は自ら進んで責任を負おうとする、オルテガが言う「精神の貴族」にならんとできるに違いないからである。逆に言えば、たとえどんな歴史遺産があろうか、そこに住まう人々が自ら一切の責任を負おうとしない「大衆人」である限り、まちづくりが展開すること等、望むべくもないのである。

本章では、川越まちづくりについて解釈することを通じ、まちづくりを成功へと導いてきた要素について考察を行ったわけであるが、ここで挙げたそれぞれの要素は何も川越だけに当てはまるものではないと考えられる。先にも述べたとおり、まちの人々の精神活動の所産がまちづくりを発展させてきたのであり、まちづくりに尽力してきた人々、そしてその人々の意志によって、まちづくりを導引することができるという可能性を示唆しているものと言えよう。

謝辞: インタビューをお引き受け頂きました可児一男氏、植松久生氏、福川裕一氏、佐々木政雄氏の各氏より、これまでのご経験について大変熱心にご教示頂きました。各氏のこれまでのご尽力に深甚なる敬意を表するとともに、多大な協力を頂いたことを付記し、ここに深謝の意

を表します。なお本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「サイレント層の意識・位置づけを明確にする交通調査手法および計画プロセス」の研究助成により行われた研究成果の一部である。

参考文献

- 1) Bruner, J.: Life as narrative, *Social Research*, Vol.54, No.1, 1987.
- 2) Bruner, J. (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 訳) : 意味の復権 フォークサイコロジーに向けて, ミネルヴァ書房, 1999.
- 3) Bruner, J. (田中一彦訳) : 可能世界の心理, みすず書房, 1998.
- 4) デイルタイ (久野昭訳) : 解釈学の成立, 以文社, 1981.
- 5) Mankowski, E. and Rappaport, J.: Stories, identity, and the psychological sense of community, *Knowledge and Memory: The Real Story*, Lawrence Erlbaum Assoc. Inc., pp. 211-226, 1995.
- 6) Miller, P. J.: Personal storytelling in every life: Social and cultural perspectives, In Robert, S. (eds.), *Knowledge and Memory: The Real Story*, Lawrence Erlbaum Assoc. Inc., pp. 177-184, 1995.
- 7) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラルヒストリー, 水曜社, 2005.
- 8) 服部敏也: PRI Review No.36 オーラルヒストリーの勧め, 国土交通省国土交通政策研究所, 2010.
- 9) 社団法人日本建築学会(編) : 景観法と景観まちづくり, 学芸出版社, 2005.
- 10) 新谷洋二(編著) : 歴史を未来につなぐ まちづくり・みちづくり, 学芸出版社, 2006.
- 11) 東京大学 cSUR-SSD 研究会(編著) : 世界の SSD100 都市持続再生のツボ, 彰国社, 2007.
- 12) 西村幸夫: 西村幸夫風景論ノート 景観法・町並み・再生, 鹿島出版会, 2008.
- 13) 安島博幸(監修), 国土総合研究機構観光まちづくり研究会(著) : 観光まちづくりのエンジニアリング 観光振興と環境保全の両立, 学芸出版社, 2009.
- 14) NPO 法人電線のない街づくり支援ネットワーク(編著) : 電柱のないまちづくり 電線類地中化の実現方法, 学芸出版社, 2010.
- 15) やまだようこ(編著) : 人生を物語る, ミネルヴァ書房, 2000.
- 16) 山下裕作: 実践の民俗学, 農村漁村文化協会, 2008.
- 17) 宮崎正美, 福川裕一, 内田雄造, 可児一男ほか: *Esplanade No.50* 住民の主体性を取り込んだまちづくり 埼玉県川越市, INAX, 1999.
- 18) 川越市: 川越市入込観光客数, 2010.
- 19) 藤井聡: 景観改善の「物語」とその「伝染」について, 都市計画, Vol.57, No.6, pp. 21-24, 2008.
- 20) 浅野智彦: 自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ, 頸草書房, 2001.
- 21) 桜井厚, 小林多寿子: ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門, せりか書房, 2005.
- 22) 川越一番街商店街活性化モデル事業推進委員会: 川越一番街商店街活性化モデル事業報告書, 1986.
- 23) 鎌田薫, 福川裕一: NIRA 研究叢書 実践的「町づくり規範」の研究・川越の試み, (株)地区計画コンサル

- タンツ, 1988.
- 24) 財団法人環境文化研究所:川越の町並みとデザインコード, 1981.
- 25) 町並み委員会:川越一番街町づくり規範, 1988.
- 26) クリストファー・アレグザンダー(平田翰那訳):パタン・ランゲージ 環境設計の手引, 鹿島出版会, 1984.
- 27) 文化庁:文化財保護法, 第九章 伝統的建造物群保存地区 第百四十二条~第百四十四条, 最終改正 2007年3月30日法律第七号
- 28) 川越市:川越市歴史的地区環境整備街路事業調査報告書, 1986.
- 29) 川越市:川越市歴史的地区整備に関する調査報告書, 1990.
- 30) 藤井聡:土木計画学—公共選択の社会科学—, 学芸出版社, 2008.
- 31) 藤井聡:土木と農の連携は「健全なる風土」創出の根幹, In. 三澤勝衛著作集「風土の発見と創造」, Vol. 4, 三澤「風土学」私はこう読む, 農文協, pp. 305-320, 2009.
- 32) 藤井聡, 長谷川大貴, 中野剛志, 羽鳥剛史:「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義, 土木学会論文集 F5, Vol.67, No.1, pp. 32-45, 2011.
- 33) ホセ・オルテガ・イ・ガセット(神吉敬三訳):大衆の反逆, ちくま学芸文庫, 1995.

(2011.3.2 受付)

DESCRIPTION OF NARRATIVES ON “KAWAGOE CITY PLANNING”:
PRACTICE AND THE INTERPRETATION
FOR CONSERVATION OF HISTORIC TOWNSCAPE

Takanori SAWASAKI, Satoshi FUJII, Tsuyoshi HATORI and Daiki HASEGAWA

Recently, there are problems to be lifeless on the centre of a city. On the other hand there is a case to regain the vigor of the city. It is helpful in city planning in the future to pay attention to such a success case and to obtain a general knowledge of how the success is led.

As the method of getting the knowledge, it is common so far to use “Natural scientific methodology” what is the unspiritual quantitative analysis. However, the author applies “Hermeneutic methodology” what is the analysis of interpreting “Narrative” to understand the thought of people who are related to the city planning.

In this research, the author first interviews various concerned about the city planning in Kawagoe City, Saitama Prefecture, where it is said that a success case of city planning, and constructs a “Narrative” through this interviews. As it is interpreted, the factor that lead success to “the Kawagoe city planning” seems to be explained.